

大地に刻まれた西会津の足跡 地形からみた西会津 その1

—序論と白坂宿—

文：田崎 敬修

江戸時代の西会津は、野沢組・大谷組・吉田組・海道組の4つの組からなっており、ともに会津藩領で領内同一の行政が行われていましたが各組・地域ごとに微妙に異なる風（出来事や風習など）が吹いていたようです。現在は「4つの組」から「5つの地区」に替わりましたが、これらについてその地区の歴史などに精通された皆さんにより執筆されたのが『にしあいづ物語 100選』です。

今月号からは西会津の歴史を地形という観点から見てみたいと思います。

何をやるにしてもその土地の地形を無視することはできません。なぜなら全てが大地を土台としているからです。ご先祖様たちの様々な営み（歴史）は地形と深く係わっており、地形という観点から見直してみると、例えばなぜそこに宿場ができ、街道が通り、館があったのかなどが分かってくるのです。今回は「白坂宿」の例で見てみましょう。

西会津町の中には5つ宿場町がありますが、白坂宿は最も小規模な宿場町です。下野尻宿と宝川宿との間には車峠の難所があり、かつ距離的にも離れすぎているということから、もうひとつ宿場が必要となりました。宿場町は街道を挟んで両側に家々が立ち並び、^{えきしよ} 駅所としての事務所（^{といや} 問屋）や旅籠・^{はたご きもいり} 肝煎宅などがありました。これらの条件を満たす場所は下野尻宿と宝川宿の間にはないでしょうか。街道筋に川谷集落がありますが宿場を作る平地の段丘が^{きこうず} 鬼光頭川上流に広がっているため不向きでした。他にないでしょうか。ありました、白坂です。

白坂は、鬼光頭川の左岸にできた幅の狭い河岸段丘上にあって長さはあまりありませんが、宿場町の形態はなんとか作れそうです。ただ段丘の幅が狭いため裏道は作れません。宿場町の特徴の一つクランク（道をL字型に曲げて見通しをきかなくする）はできたのでしょうか。川谷からの道は段丘崖で見通しがきかずクランクの役割を果たしています。宝川への道は直進すると鬼光頭川氾濫原の湿地帯に入るため段丘端の肝煎宅で曲がり山裾を通ったのです。ですから肝煎宅の所で街道が折れてクランクがしっかりできています。白坂宿は限られた地形を上手に生かして宿場の条件をクリアしたみごとな宿場町といえるでしょう。

白坂宿は、荷物を管理する駅所中心の宿場でしたが、地形の制約のため村（宿場）を拡大することができず、少人数の村ゆえの馬数不足で荷物が滞留しがちになり搬送に常に苦勞していました。そんなことから駅所責任者の問屋のなり手がいなかったり疫病で人口が激減したり様々な難題が発生しましたが、宿場をあげて解決し駅所の役割を果たそうと頑張ってきた宿場です。



▲ 国土地理院発行 1/2.5万地形図「徳沢」
拡大・着色

今月の表紙

今月の表紙は、令和5年4月末に縄沢自治区内で撮影された鯉のぼり。鯉のぼりは、古来より子どもの健康と立派に育つてほしいという家族の願いを込めて飾られているそうです。にしあいづっ子よ！大きく育て！

※撮影：ドローンアーティ
スト青津京介氏

編集後記



連休が終わると「今日、何曜日だったけ？」がしばらく続きますよね。田んぼや畑に忙しくなる時期です。無理しないことも立派な健康法だとか。皆さんもほどほどに、今月も元気にいきましよう！
よかつたら広報紙の感想も教えてください♪来月号もお楽しみに！（三留）

